石坂周造（いしざかしゅうぞう）

大二国家ノ益ヲ起シ、大二公共ノ利ヲ開カム

－太平洋岸唯一の油田・相良油田を開発－

石坂周造（1832 ～ 1903）
写真：相良油田資料館蔵

■尊攘派の志士から石油事業へ

新しい事業の創設には苦難を伴う。我が国石油業を開き、静岡県相良（さがら）町で初の石油の機械掘りを成功させた石坂周造の場合も、債務に追われ、技師に騙（だま）されるなど、創業の苦しみの連続であった。近代的な事業家ではなかったが、その使命感と不屈の闘志の中で先駆者としての役割を貫いた。

石坂周造は、長野県飯山市に生まれた。後、幕府医師石坂家の養子となり、周造を名乗る。幕末動乱の時代には、尊皇攘夷派の志士となり、山岡鉄舟、清川八郎らと交わり、前後8年、獄舎の人となった。1870（明治3）年、許されて山岡鉄舟の許に蟄居（ちつきょ）の生活を送った。石坂と鉄舟の妻とは姉妹であるので、二人は義兄弟の間柄であった。

■長野石炭油会社の創設

たまたま長野県人島田龍齊が、地元で産出したとして石油壜（びん）を持参する。これを見た宣教師から事業化するよう強く勧められて、石油事業へと身を投じる決意を固めた。1871（明治4）年8月、長野石炭油会社を設立、長野県茂菅（もすげ）村の地を選び、米国人技師ダンに委嘱（給料年1万円）し作業を進めたが、失敗に終わる。技師に不振を抱いた石坂はダンを解雇したが、この措置に対してダンは、契約違反（3年間の雇用）であるとして裁判に訴え、結局敗訴となる。1872（明治5）年8月には東京石油会社（資本15万円）へと改称する。従来「石炭油」と称されていたが、以後「石油」という呼び方が広く使われるようになった。

最盛期の相良油田　　写真：相良油田資料館蔵

静岡県指定文化財の石油櫓

■相良（さがら）油田の開発

この間、1872（明治5）年5月に静岡県相良での出油の報を知るや、早速現地に赴いて共同開発を申し入れ、相良石油支社を設置し、相良の地を国家のために起そうと願った。

1873（明治6）年には米国製の掘削機によって、出油を見る。機械掘りの成功第1号であった。しかし、この間に資金的に行き詰まり、相良支社は債権者の手に移ってしまう。相良での出油は多くはなかったが、昭和30年代まで生産が続いた。

石坂は、1881（明治14）年5月、相良石油会社を再興し、軌道に乗った後、新潟県に移って掘削を行い、1899（明治32）年、蒲田3号井で待望の出油を見た。

1903（明治36）年、享年72歳で逝去した。

（浅野伸一）